第四十一回　撹乱（一）

竹山に家を建てた翌年、小さな畑作りを手伝ってくれた町内のMさんから「石塚さんのところで木は植えないのかい、マルメロなんか香りが良くていいよ。」とすすめられた。Mさんからの提案は疎かにできないので畑の近くに少し大きめの穴を掘ってMさんからもらった土を入れて植えることにした。木の苗を扱っているところを数件見て歩くうちに、食べられる実のなる木も植えたくなった。その時植えたのはマルメロの他、梅とブルーベリーとカシスだった。その後、梅とマルメロは実ができるまでには時間がかかるが毎春、香りの良い花を咲かせて家の周りに彩りを添えてくれた。ブルーベリーとカシスはすぐに実ができ年々収穫も多くなってきた。

　さらに欲を出してプルーンの苗を二株植えた翌年の春。雪解けとともに姿を現した木々の根元の様子がなにかおかしい。妙に白っぽいのだ。近づいて良く見ると細かに削られた跡がある。それも根元を一周し高さ十センチメートルくらいがそうなっているではないか。プルーンに至っては五十センチメートルほどの苗の全てが削られていた。Mさん曰く「これはネズミにやられたね。」

　木の表皮のすぐ下には、葉が光合成でつくった炭水化物などのエネルギー源を根に運ぶ重要な管があるのだが、そこをやられてしまったのだ。土の中の水を葉に運ぶ管はさらに奥にあるので傷つけられていなかった。なので、その年は何も無かったかのように花を咲かせてくれていた。ただ、翌年になると元気がなくなりマルメロは葉を落とすこともなく立ち枯れてしまった。梅は蕾をつけてもう一年かなと思ったが、その蕾も硬いままで終わってしまった。

　木熊の下からネズミの家族がぞろぞろ出てきたときには、これ以上食べられてしまわないようにすぐに木熊を解体し、芯の小枝を取り除き風通しの良い状態に積み直した。そして冬を前にした雪囲いの際には、木の根元と土の間を覆うように頑丈なシートを被せておいた。ただ、それでも何本かのブルーベリーが犠牲になってしまった。このような食害はネズミだけでなく、ここK市ではエゾシカ、アライグマ、キツネなどによる農業被害は年間延べ五・五ヘクタールにもなるようだ。

　植物にダメージを与えるのは動物だけではない。あれは竹山での最初の夏だっと思うけど、敷地のなかで一、二をあらそう大きな木であるハンノキが夏の盛りなのに葉が茶色になってしまった。良く見ると葉はレース模様のように葉脈を残して向こうが透けて見える状態になっていた。近くには小さな黒い甲虫がウヨウヨうごめいている。調べると文字通りハンノキハムシというものらしい。この虫は大発生することがありほとんどの葉は食べられてしまう。なんせ、葉に産み付けられた卵が孵化して幼虫になると一ヶ月ほどもりもり食べ続け、その後土に潜り蛹になるのだが、二週間ほどで羽化して成虫になり、また、冬が来るまでもりもり食べ続けるのだそうだ。ハンノキが枯れてしまうのではと心配になり駆除を試みるがきりがない。これが二、三年続くとピタリといなくなり、枯れることはないのだそうだ。